

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02672

研究課題名(和文) 印欧諸語の強勢代名詞及び接語代名詞のパラダイムの通言語的研究

研究課題名(英文) A Crosslinguistic Study of Strong and Clitic Pronouns in Indo-European Languages

研究代表者

中村 渉 (Nakamura, Wataru)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：90293117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は印欧語の代名詞の曲用パラダイムの変異と複他動詞文の非主語項を照応する接語代名詞の実現形式の言語間・方言間変異を最適性理論により説明することであった。形態・意味の有標性階層から派生する性・数・格・人称素性の有標性制約群・忠実性制約群及び上記の有標性階層と意味役割階層から生じる調和的制約配列を提案した他、同一の素性複合を持つ接語の反復を禁止する有標性制約を提案したが、代名詞の曲用パラダイムの一部(特に、無標的な素性複合が有標的形式により担われる場合)、複他動詞の接語代名詞群の変異については、資料不足等のためもあり、考察を深めることができなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、言語の文法を派生的な規則の集合体として見る伝統的な文法観ではなく、文法を普遍性の高い制約の集合体と見る文法観に基づき、印欧諸語の代名詞の曲用パラダイム及び複他動詞(二重目的語)構文に生じる接語代名詞の実現形式の変異を有標性制約(経済性を要求する制約)と忠実性制約(類像性を要求する制約)の相互作用から導くことを意図したものである。本研究は文法を言語毎に異なる恣意的規則の集合と見る見方を否定することを通じて、自然言語を環境及び社会との相互作用を介して実現される人間の活動の所産として提示することを目的とするものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explain the cross-linguistic variations of declension paradigm for pronouns in the Indo-European language and the cross-linguistic/cross-dialectal variations of how clitic pronouns that appear in ditransitive constructions. I proposed a set of markedness constraints derived from markedness hierarchies of the gender, number, case, and person, a set of faithfulness constraints, and a set of harmonic alignment constraints derived from the above-mentioned markedness hierarchies and a hierarchy of semantic roles, but I couldn't entirely work out how to derive some declension paradigms for pronouns and the typological variation of clitic clusters in the Indo-European languages partly due to scarcity of relevant data.

研究分野：言語学

キーワード：最適性理論 代名詞 曲用パラダイム

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者がこれまで携わってきた、格の類型論的研究及び印欧諸語の名詞・限定詞・形容詞の曲用パラダイムの言語間変異に関する研究の延長線上にある。

従来の曲用パラダイムに関する研究は各言語(例:ドイツ語,ロシア語,ポーランド語,ラテン語)の特定の名詞類・形容詞類のパラダイムに焦点を当て、格の語義分解に基づいて行われる研究が中心であったが、これらの先行研究は語義分解の恣意性(語義分解が分析対象である各言語の曲用パラダイムの融合の説明から導かれたものであり、拡張性・普遍性に乏しい)と循環性(格の融合パターンを説明するために提案された語義分解に基づいて、格の融合を含む曲用パラダイムを説明する)という問題を抱えていた。

こうした先行研究の問題を解決するため、格の語義分解を採用しない代わりに、曲用パラダイムを構成するジェンダー、数、格、人称の有標性階層から導かれる有標性制約群と左記有標性制約群に対抗する忠実性制約群の相互作用から統語的素性複合と形態的素性複合の写像を導き、形態的素性複合に対して語彙挿入を行う(後期挿入仮説に基づく)提案を行い、名詞類・形容詞類・代名詞の曲用パラダイムを導く研究を行ってきた。この研究を承けて、代名詞の曲用パラダイムとロマンス諸語の複他動詞文の接語代名詞群のパラダイムの言語間/方言間変異を、名詞・限定詞・形容詞の曲用パラダイムの変異と同様の制約群(及び義務的抑揚原則を実現し、一般化した有標性制約)から導くことを計画し、従来は名詞類・形容詞類・代名詞の曲用パラダイムとは別の道具立てにより分析されていた接辞代名詞群と曲用パラダイムの統一的分析を提出することを構想した。

2. 研究の目的

本研究の目的は印欧諸語の名詞類・形容詞類の曲用パラダイムの変異の説明を目的として提案した性・数・格・人称素性に関する有標性制約群・忠実性制約群、複他動詞構文の接語代名詞群における人称と意味役割の共起制限を捉える有標性制約群、接語代名詞群における同一形式の接語の反復を禁じる(「義務的抑揚原則(Obligatory Contour Principle)」を一般化した)有標性制約に基づき、ゲルマン・ロマンス・スラヴ諸語・バルト諸語の代名詞の曲用パラダイムの変異及びロマンス諸語の複他動詞文における接語代名詞群のパラダイムの言語間/方言間変異を説明することである。

3. 研究の方法

印欧諸語の文法書・研究書、印欧諸語の形態論・統語論に関する研究書、博士論文、雑誌論文等から代名詞の曲用パラダイムのデータを収集すると共に、複他動詞文に生じる接語代名詞群の実現形式に関するデータは上記のような文献から収集すると共に、各言語の母語話者をインフォーマントとして収集することによって、文献の欠落部分を補う。なお、人称代名詞を含む多様な代名詞(人称/指示/所有/否定/不定/疑問代名詞)のパラダイムに加えて、融合のパターン(例:女性・単数・属格↔女性・単数・与格)にも留意する。

理論的な枠組としては、後期挿入仮説を採用し、統語的素性複合から形態的素性複合への写像及び形態的素性複合に対する語彙挿入の二段階の写像により、代名詞のパラダイムと複他動詞文の接語代名詞の実現形式の変異を説明する。なお、統語的素性複合から形態的素性複合への写像は、

- ①形態的有標性階層(性階層,数階層,格階層,人称階層)から派生される有標性制約群,
- ②(有標性制約群に対抗する)忠実性制約群,
- ③形態面の有標性階層である性階層/人称階層と意味的有標性階層に相当するマクロロール階層の調和的制約配列から派生される有標性制約の下位階層,
- ④人称階層と意味役割階層(の一部)の調和的制約配列から派生される有標性制約の下位階層,

を最適性理論によりランク付けしたものである。

4. 研究成果

本研究の目的は印欧語の代名詞の曲用パラダイムの変異と複他動詞文の非主語項を照応する接語代名詞の実現形式の言語間・方言間変異を最適性理論により説明することであった。形態・意味の有標性階層から派生する性・数・格・人称素性の有標性制約群・忠実性制約群及び上記の有標性階層と意味役割階層から生じる調和的制約配列を提案した他、同一の素性複合を持つ接語

の反復を禁止する有標性制約を提案したが、代名詞の曲用パラダイムの一部（特に、無標的な素性複合が有標的形式により担われる場合）、複他動詞の接語代名詞群の変異については、資料不足等のためもあり、考察を深めることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|